

大学における映像アーカイブ活用と新たな展開  
大学と放送ライブラリーによる取組の報告

記録

---

2017年11月18日(土)

---

# 目次

I. 開催概要	1
II. 登壇者プロフィール	2
III. 成果報告	
①筑紫女学園大学現代社会学部 荒巻龍也 教授	3
②早稲田大学教育学部 伊藤守 教授	4
③東京大学大学院情報学環 丹羽美之 准教授	5
④上智大学文学部 柴野京子 准教授	6
IV. パネルディスカッション	
「アーカイブ番組の利用促進に向けて」	7
V. セミナー参加者からの意見	9

## I. 開催概要

# 大学における映像アーカイブ活用と新たな展開 大学と放送ライブラリーによる取組の報告

放送ライブラリーの公開番組を教材として大学の授業に活用するサービスを利用した大学教員を招き、事例報告とパネルディスカッションを行った。

■日時 2017年11月18日(土) 13:30～16:30

■会場 上智大学 四谷キャンパス 12号館102教室

### 第1部 (13:30～15:20)

- ・開会挨拶 音 好宏 (上智大学 教授)
- ・番組利活用事業の説明 森 昭師郎 (放送番組センター 主幹)
- ・事例報告
  - ① 荒巻 龍也 (筑紫女学園大学 教授)
  - ② 伊藤 守 (早稲田大学 教授)
  - ③ 柴野 京子 (上智大学 准教授)
  - ④ 丹羽 美之 (東京大学大学院 准教授)

### 第2部 (15:30～16:30)

- ・パネルディスカッション
  - ① パネラー 荒巻 龍也 (筑紫女学園大学 教授)
  - ② 〃 伊藤 守 (早稲田大学 教授)
  - ③ 〃 柴野 京子 (上智大学 准教授)
  - ④ 〃 丹羽 美之 (東京大学大学院 准教授)
  - ⑤ 進行役 音 好宏 (上智大学 教授)
- ・質疑応答

■主催 公益財団法人 放送番組センター  
上智大学メディア・ジャーナリズム研究所

## Ⅱ. 登壇者プロフィール

	<p>荒巻 龍也(あらまき たつや) 筑紫女学園大学 現代社会学部 現代社会学科 教授 所属学会等 イギリス・ロマン派学会、イギリス・ロマン派文学研究</p>
	<p>伊藤 守(いとう まもる) 早稲田大学 教育学部 教授 所属学会等 社会情報学会、日本学術会議、日本社会情報学会、日本マス・コミュニケーション学会</p>
	<p>柴野 京子(しばの きょうこ) 上智大学 文学部 新聞学科 准教授 所属学会等 日本社会学会、日本出版学会、日本マス・コミュニケーション学会、メディア史研究会、デジタルアーカイブ学会</p>
	<p>丹羽 美之(にわ よしゆき) 東京大学 大学院 情報学環 准教授 所属学会等 日本社会学会、放送批評懇談会、日本マス・コミュニケーション学会、日本映像学会</p>
	<p>音 好宏(おと よしひろ) 上智大学 文学部 新聞学科 教授 所属学会等 社会情報学会、放送批評懇談会、日本平和学会、日本社会学会、情報通信学会、日本マス・コミュニケーション学会</p>

### Ⅲ. 成果報告①

筑紫女学園大学  
現代社会学部現代社会学科  
荒巻 龍也 教授



#### ■ 番組を利用した授業

文学部 英語メディア学科 『メディア文化論』『テレビ論』(2016 年度)

現代社会学部 現代社会学科 『現代社会とメディア』(2016 年度)

#### ■ 利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
NHK東京テレビジョン開局に当たって	NHK	報道・時事	1953.02.01
ドラマ 風光る	NHK	ドラマ	1954.11.24
私の秘密	NHK	クイズ・ゲーム	1958.01.02
日本の素顔[8] 日本人と次郎長	NHK	ドキュメンタリー	1958.01.05
コント55号! 裏番組をブッ飛ばせ!!	日本テレビ放送網	芸能・バラエティー	1969.07.27
連続テレビ小説 おしん 第1週[1]～[6]	NHK	ドラマ	1983.04.04

#### ■ 利用形式

講義中の上映、予習・復習用の個別視聴

#### ■ 報告要旨

##### (1) 利用に至るまで

放送ライブラリーの研究者ブースを利用させてもらっていた時に番組を授業で使えることを知った。申し込み前にインターネット上で視聴できないため、放送ライブラリーに訪問して番組内容を確認した。

##### (2) 利用方法

学内の LMS (学習管理システム) 経由で視聴することとし、学生には授業中に番組の一部を上映することを事前に伝え、空き時間を利用して授業前に視聴しておくよう促した。

授業では、日本人がテレビをどのように受容していったかを、初期のテレビ番組を視聴しながら説明した。放送当時は俗悪番組的な扱いを受けた『裏番組をブッ飛ばせ!!』なども、その影響を考えるという意味で取り上げた。

##### (3) 効果

学生は、現在のテレビ番組とかなり違うところを新鮮に感じている様子であった。テレビ放送が始まってすぐの時代の番組がどのようなものだったか体験させることができた。

##### (4) 課題と提言

教員はシラバスを書く段階で、グループワークを番組視聴に基づいて行う、のような計画を立てる必要がある。申し込みの時期によるが、利用許諾の結果が分かる前にシラバスを書いて授業設計をしたものの、最終的に許諾が得られず、授業内容を変更しなければいけない可能性があることが難しい点だと思う。私が利用した際にはいくつかの番組が最終的に許諾を得られなかった。

福岡と横浜という地理的な要因があったこともあるが、利用する番組を決める段階で、地方でも事前に視聴できればいいと思う。また、より多くの番組を利用できるようになるといい。

### Ⅲ. 成果報告②

早稲田大学  
教育学部

伊藤 守 教授



#### ■ 番組を利用した授業

教育学部 『広報関係論Ⅱ』(2015 年度)

#### ■ 利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
日本の素顔[99] 奇病のかげに	NHK	ドキュメンタリー	1959.11.29
ある人生 メダカ課長	NHK	ドキュメンタリー	1966.05.21
特集ドキュメンタリー 和賀郡和賀町 1967年夏	NHK	ドキュメンタリー	1967.11.01
特集ドキュメンタリー 廃船	NHK	ドキュメンタリー	1969.03.22
ドキュメンタリー 富谷国民学校	NHK	ドキュメンタリー	1969.11.01

#### ■ 利用形式

講義中の上映、予習・復習用の個別視聴

#### ■ 報告要旨

##### (1) 利用のねらい

テレビ離れが進んでいる世代の学生にドキュメンタリー番組を見せること自体に重きを置いた。そして、テレビ放送初期のドキュメンタリー番組を見せることで、現在とは異なる形式、表現方法、斬新な手法を見て、改めてテレビの可能性を学生に考えさせたかった。また、文字でなく映像で考える訓練を行いたかった。

##### (2) 授業方法

学生は事前視聴による予習をしてから授業に参加する。講義では番組のポイントとなる場面を 30 分程度見せてから、解説をした。講義の最後には番組についての感想やコメントを提出させるようにしていた。

##### (3) 効果

学生によって程度の差はあるが、事前に番組をしっかりと見てきてから解説を聞くと、映像の読み取り能力が向上するのは明らかであると感じた。ある学生は講義では扱わなかった番組を自主的に視聴し、映像に出てきていないシーンをイメージさせるためにどんな工夫がされているか、音と映像の関係性についてどうか等々の分析を行った。短い期間でここまで辿り着いたことは非常に意味があることだと思う。

##### (4) 課題と提言

学内に設置したパソコンだけで、決められた時間にしか視聴できず、使い勝手がよくなかったと思う。番組に関しても、品揃えがまだまだ不足しているので整備してほしい。

アメリカでは十数の大学が日本のテレビ番組を共同利用している。日本でも同様にシステム作りをしていく必要があると思う。これはメディア教育、映像アーカイブの活用という面だけでなく、海外発信も含め重要になってくる。色々と考えていくべき時期に来ているのではないかと思っている。

### Ⅲ. 成果報告③

東京大学  
大学院情報学環  
丹羽 美之 准教授



#### ■番組を利用した授業

教養学部『マス・メディア論』(2014年度)

#### ■利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
NHKテレビ映画 山の分校の記録	NHK	ドキュメンタリー	1960.05.05
ズバリ! 当てましょう 600回記念大会	フジテレビジョン	クイズ・ゲーム	1976.09.11
日本をつくる 黒部峡谷	フジテレビジョン	ドキュメンタリー	1962.08.19

#### ■利用形式

講義中の上映

#### ■報告要旨

##### (1) 授業について

この授業は、履修生がほぼ1年生で、文系理系を問わず毎年約300人が履修する大規模授業（マスプロ授業）である。テレビが戦後日本をどのように映し出してきたかと同時に、テレビは戦後日本をどのように動かしてきたかを学ぶ。バラエティー、ドラマ、ドキュメンタリー、ジャンルを問わず何でも使い、テレビの総体を見せる。

##### (2) 学生の反応

高校では戦後史をほとんど教えない。学生は戦後史を知識として知っていても、実感を持っていない。テレビ番組を使って戦後史を学ぶと、現実にいる人を自分の目で見られ、具体的なイメージになる。テレビ番組を見ることで歴史が身近で人間らしいものとして感じられるようになる。この感覚は戦後史を学ぶ際にとっても大事である。学ぶことは基本的に非効率な作業であり、思っていたことが実は違っていたり、横道にそれたりといったことを繰り返す作業で、そのように学ぶと歴史が立体的に、動いているように見えてくる。こういう感覚を持てることは、テレビ番組を使った授業の特徴である。

テレビ番組は作り手の視点をはっきりしているものが多い。視点によって世界の見え方が全く異なることがテレビを見ていると分かる。テレビ番組は教科書に書かれない問題をそれぞれの視点でぶつけ合っている。

300人相手にマイクを持った私が喋る授業であったが、参加型だと感じていた学生がいた。学生はテレビ番組と対話し始め、何が描かれている、何を描こうとした、と考え出す。テレビを見るだけで楽しそうだと受講した学生が多かっただろうが、見始めたらどんどんのめり込み、こんな番組が見たかった、となる。意欲のない人をいかに振り向かせるか。そういう意味でもテレビ番組は面白い。

##### (3) 効果

副次的な効果として、テレビ番組も学問も面白い、と学生たちが思い至ってくれることがある。テレビを見直した、テレビはこんなに面白い、と気づき、学問自体の面白さを感じることに繋がる。学生の中では戦後日本、戦後史という真面目で固いイメージがある。対して、テレビは娯楽であり、軟らかいイメージで、両者は繋がらない。高校まではテレビを使って戦後史を学ぶ様な授業は無かったし、やっていたとも思わなかった。しかし、大学に入った途端、テレビで戦後史を学び、身をもって体験する。学問って自由なんだ、面白いんだ、と気づいてくれる。今後、学生たちがどんなことを学ぶにしても、どんな対象でも学問になりうることを早い段階で学んでもらう意味で、副次的な効果があると思う。

### Ⅲ. 成果報告④

上智大学  
文学部

柴野 京子 准教授



#### ■番組を利用した授業

文学部 新聞学科 『デジタルアーカイブ論』(2016～2018 年度)

#### ■利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
人類・その明日 資源問題への挑戦 [1][2][3][5][6]	毎日放送	ドキュメンタリー	1975.01.05～ 1975.02.09
名作のふるさと 第1集 [1][4][6][8][11]	テレビ神奈川	ドキュメンタリー	1973.01.11～ 1973.03.22
地球時代[2] いま原子力発電は…	テレビ東京	ドキュメンタリー	1977.01.17

#### ■利用形式

メタ・データ作成のための視聴

#### ■報告要旨

##### (1)授業の目的と方法

グーグルネイティブと言える世代の学生たちに、インターネット上の情報を構造的に理解し、使いこなし、構築するというリテラシーを教える必要がある、と切実に考える中でこの授業を構想した。

この授業は、アーカイブ資料を読む、デジタルアーカイブを使ったプレゼンテーションを作る、放送番組を視聴してメタ・データを作成する、の三部で構成した。受講生全員が作業に必要なパソコンとインターネットを自由に使える教室を使用し、番組は学内のオンライン学習管理システムから視聴できるようにした。

##### (2)メタ・データ作成

放送番組センターが著作権を持つ放送ライブラリーの未公開番組を視聴してメタ・データを作成した。作成したデータは放送番組センターが番組を一般公開するとき使用される。台本と照合しながら番組を見て、著作物、出演者、使用されている文芸作品などを確認してメタ・データを作成することが基本的な作業となり、ここから、3点の提出物を作成する。一つはシーン表のような番組情報シートである。もう一つは印象的なシーンのキャプチャー画像3点である。そして、放送日時等の基本情報、出演者、使用されている著作物、あらすじ等を記入した保存番組記録表だ。このあらすじがコンテンツとして公表されるので、時間をかけて書いた。

##### (3)効果

データ作成のために細かく集中して番組を見ることで、各シーンの意味を知り、番組制作に多くの人と権利が関わることや、番組を残すことの意義を理解した学生が多かった。作成したデータが放送ライブラリーで公開されることで、緊張感や責任感を持って作業に当たれた。

##### (4)今後の課題

学生からは「ドキュメンタリー以外の作品を見たい」「自宅でも視聴したい」などの声があった。

私としては、受講者数や、アーカイブを利用するための通信環境に応じて、授業の組み立てに工夫が必要だと考えている。



## IV. パネルディスカッション

### 「アーカイブ番組の利用促進に向けて」



#### パネリスト

- 荒巻 龍也 (筑紫女学園大学 教授)
- 伊藤 守 (早稲田大学 教授)
- 柴野 京子 (上智大学 准教授)
- 丹羽 美之 (東京大学大学院 准教授)

#### 司会

- 音 好宏 (上智大学 教授)

#### ■ 発言要旨

##### 番組アーカイブについて

丹羽：アーカイブを自ら作っていく、作ることを支援していく役割も研究者にはあるのではないかと考えている。『NNドキュメント』という日本テレビ系列 29 局が制作し、47 年、約 2,300 本の歴史があるこのドキュメンタリーは、戦後史を学ぶ教材として価値があると考えた。同時に放送局側には、各制作局が管理してきた番組データを総覧できる場がなく、また制作者の交代によって番組の記憶が継承し辛くなっている現実があった。放送局と大学が共同でアーカイブ活用に取り組むのは非常に稀なことだが、今回は大学がデータベース作成を手伝う代わりに、番組データを研究にも利用させてもらうという、お互いのメリットが合致した事例となった。

音：国内外の制作者が集う東京ドキュメンタリーフェスティバル (TOKYO Docs) では、日本の参加者に世界の優れたドキュメンタリー百選を紹介している。アーカイブに対する認識が日本は弱い、アーカイブを強化し、グローバル化に対応しておかないと、日本だけが番組制作におけるガラパゴスになってしまう危機感がある。

伊藤：アメリカでは大学間で連携し番組アーカイブを共同で利用するシステムがあるが、日本にも同じシステムが必要。制度や組織、費用面など協議すべき点が多いが、大学教育における映像利用だけでなく、海外への発信も含めて今後重要なことになる。

## 大学における番組利用サービスに対する意見、要望

荒巻：特定の教室でしか見られないため、学生は視聴する時間を捻出するのが難しい。特に私の大学は都市部でないためか、授業が終わるとすぐ帰るのが普通である。スマートフォンなどで場所を問わずに見られる環境になればいい。教員としては、事前に番組内容を確認したくても横浜に行かなければ視聴できないため、授業で使う前に視聴できる環境や、地方でも視聴できる拠点があると便利だ。

丹羽：申し込んでから番組を使えるようになるまでの期間とされている3か月間は長いと感じる。学生の反応や出来事を受けて授業計画を考え直したいときに対応し辛い。また、学生たちに自分で分析したい番組を見つけ出させるような実習の場合、見つける期間を考えると申し込んでから使えるまでに半期の授業が終わってしまうため、使えない。期間短縮のために、一度利用された番組は、次回以降の権利処理が不要になる仕組みが作れないかと思う。

また、利用できる公開番組数が多いとは言えないのが現状だ。放送ライブラリーは民放、NHKを含めて沢山の番組を収録して公開をしているが、絶対数が足りない気がする。受賞番組だけでなく、いわゆるB級作品も含めて集めていく必要がある。

NHKにはNHKトライアル研究という仕組みがあり、NHKアーカイブスで非公開の番組も含めて研究者に提供できる仕組みがある。若手研究者でテレビを研究したい人は、まずNHKに行っており、日本のテレビの歴史がNHKアーカイブスの資料だけで語られ、論じられることになってしまう。研究や批評の分野で、民放が無かったことにされる危機感を、ぜひ持っていただきたい。

柴野：番組だけではなく、台本があれば一緒に公開をしてほしい。ドラマの場合にはシナリオがあるイメージがあると思うが、そうでない番組にも台本があって、構成されていることを学べる機会を提供できるといい。

## アーキビストの養成について

柴野：きっかけを与えることでアーカイブに興味を持つ学生が少なくないと思った。アーキビストという仕事がある、ということに思いを馳せることが全く無かったが、実際に体験してみると、地道ではあるが面白い、と感じている様子である。一つのきっかけとして、アーカイブ資料や番組を活用できるのではないかと思う。

音：アメリカのミシガン大学がアーカイブの授業をやっている、一番優秀な学生はナショナルアーカイブズのスタッフになっていく。アーキビストという次世代に歴史を残すための作業ができる人材を、どうやって高等教育機関で育てていくかという課題は、アーカイブの議論とセットで行っていくべきである。

## 番組アーカイブにおける課題とその意義

荒巻：大学間の連携の意識は、東京と福岡でかなり違う。地方では、大学間で協力して何かやろうとかいう意識もあまりなく、拓かれていない。大学間の連携は、東京一極集中、もしくは大都市であれば可能なものかもしれないが、東京の状況を聞いて、今後福岡でどういう展開ができるか、考えさせてもらいたい。

伊藤：アーキビストの養成が第一。映像アーカイブだけでなく、様々な文化的な施設で情報化に見合う形でアーキビストの養成が求められている。また、アーカイブされたものをどう利用するかという目利きができる人、いわば“映像のソムリエ”も必要だと今日の議論を聞いて改めて実感した。

丹羽先生からもあったが、NHK先行でアーカイブが進んでいることについて、民放もこの問題を積極的に受け止めてほしい、尚且つ、必要なのはドキュメンタリーだけではない。あらゆるジャンル、地方の番組を含め、全てアーカイブ化してほしい。今日の催しのタイトルである『新たな展開』に結びつくような、色んな議論が展開していくことを期待したい。

丹羽：アーカイブを整備することは制作者や放送局自身にとっても、視聴者にとっても、意味のあることだと考えている。番組を作る、集める、残す、そして集めた番組の批評や研究をし、それがまた制作現場にフィードバックされていく。映像やテレビの世界でもこの循環をちゃんと作らないとテレビ文化は再生産されず、発展もしていかないと思う。このような知的サイクルを作るために、アーカイブが必要だと最後に強調したい。

柴野：伊藤先生からもアーキビスト養成の話があったが、図書館司書の分野ではデジタルアーカイブが進む中で、それをコントロールできる司書の資格が必要だという議論がある。書物や放送はデジタルでは特定メディアを持っていないのではないかと。動画も静止画もテキストも一つのアーカイブの中で構造化されるのではないかと、と考えていた。そういうことを理解するために、ある程度の文脈を理解できる教養や背景知識を教えていくことこそ、大学がしなければいけないことではないだろうか。

一方、丹羽先生からあったように、特に現代史の部分において、背景知識や教養はテレビの中にネタは詰まっている。番組アーカイブは、メディア研究者だけが使うものではない。国文学や歴史学に使ってもいい。番組はもっ

と色々な形で使えることを、私たちメディア研究者も大学内でアピールしていく必要がある。

音：東日本大震災の被災地のケーブルテレビの方が震災の被害を受けたとき、やむにやまれず地元の商店の開いているところから入って缶詰を持っていった。この時の映像はケーブルテレビ局に残っていて、この経営者は「これは歴史の記録だ」として保存した。まさにアーカイブしているのだが、公開していない。記録し、保存するけれど、公開しない。それは彼が持っているケーブルテレビ的ジャーナリストとしての判断なのかと思ったことがあった。

地方の問題という点では、例えばケーブルテレビを見てみると、CMS（コンテンツ管理システム）を用いてケーブルによる全国ネットワークが既にテクノロジーとして作り上げられている。大学やメディアの現場が、どのような形で技術の進歩に向き合っていくか、デジタルアーカイブから突きつけられていると認識した。

## V. セミナー参加者からの意見

- 商売としてある程度の料金をとり、放送番組センターでアーカイブしている歴史的に価値のある映像を使えるようにして、それを使って作品を制作できる環境を作してほしい。（テレビディレクター）
- 映像ライブラリーにとって最も大事な編集マンを養成できるよう、大学の中に編集スタッフの勉強ができる施設を作り、プロフェッショナルのエンジニアを入れ、学問の形として大学で教えてほしい。ライブラリーを生き物にしてほしい。（テレビディレクター）
- フィルム素材は経年劣化するのでどんどん廃棄される現状がある。これを早く保存し、活用する仕組みを作る必要があるのではないかと思う。（元 映画製作者）
- 2期にわたり上智大学で柴野先生の授業のお手伝いをした。柴野先生の報告にあった通り、放送局にライブラリー部門や著作権部門があることや、リテラシーを学生に学んでいただいたことは本当に効果があったと思う。放送局への就職希望が減っている現状があるかと思うので、授業を通じて、学生たちの育成ができれば良い。（放送番組センターOB）

### 【セミナー当日の様子】

